交流分析のトレイニングと資格

Training and Certification in Transactional Analysis

河合 美子

KAWAI Yoshiko

キーワード：　交流分析、トレイニング、資格、サイコセラピー、スーパーヴィジョン

はじめに

サイコセラピーやカウンセリングに関しては、学会などがそれぞれに認定する資格が日本国内に数多くある。2012年12月刊行の「精神療法」誌ではセラピストの資格が特集され、精神分析をはじめ、認知行動療法、集団精神療法等、セラピストの資格取得のプロセスが紹介されている。専門家になるためにどのようなトレイニングを必要とするか、どのような方法で資格を認定するかは、アプローチの特色を反映し、様々である。

本稿では、1950年代にアメリカの精神科医Eric Berneが始めた交流分析（Transactional Analysis、以下、TA）のトレイニングと資格をとりあげる。

TAの教育・研究に関わる団体は国外・国内それぞれ複数ある。その中で国際TA協会（International Transactional Analysis Association、以下、ITAA）は、創設者Eric Berneが1964年に設立した国際団体で、他の団体と連携して資格認定を行ってきている。

ITAAでは毎年、世界各国で開催する年次大会の会期に合わせて資格試験を行っている。2013年8月には初めて日本で年次大会が開かれ、その際、筆者はCertified Transactional Analyst（有資格交流分析家、以下、CTA）の口頭試験を受けて資格を取得した。そこで、筆者自身の体験も交えて、トレイニングと資格取得のプロセスを述べ、そこに現れるTAの特徴を論じたい。

1. TAのトレイニングと資格認定の概要

[1] TAの団体と資格認定

現在、TAに関する代表的な団体には、ITAA以外に、ヨーロッパ諸国のTA協会が所属するヨーロッパTA協会（European Association of Transactional Analysis：EATA）と、オーストラリア、ニュージーランドを中心とするTA協会連合、（Federation of Transactional Analysis Association：FTAA）[1]がある。世界各国にTA協会ができていく中でITAAの会員数は990名と減少しているが、EATAの会員数は7500名を超えている（2013年9月現在）。

これら3団体は,資格認定に関する協議会（World Training and Certification Council：WTCC）に委員を送り、認定基準と方法を共通にし、資格を国際性・互換性のあるものとしている。ITAAの専門職基準部門（Professional Standards Division、以下、PSD）は、トレイニングとスーパーヴィジョンの基準や倫理綱領を定める専門職基準委員会（Professional Standards Committee：PSC）と、契約と試験等の実施に関わる国際資格認定委員会（International Board of Certification、以下、IBOC）から成る[2]。

ITAAのPSDのウェブサイトには、トレイニング・試験ハンドブック（ITAA, 2010、以

下、ハンドブック）が掲載され、ダウンロードが可能である。日本では、ハンドブックをNPO法人日本TA協会（TAAJ）が、IBOCの前身であるT＆CC（Training and Certification Council）より許可を得て邦訳し、試験に関する部分を中心にウェブサイトで公開している（日本TA協会、2011）。本稿では、ITAAのハンドブック原文と日本TA協会による邦訳版に基づいて、主としてCTAのトレイニングと資格の規定を紹介する。

[2] TAの応用分野

ITAA, EATA, FTAAが認定する資格では、TAを応用する分野を、カウンセリング・教育・組織・サイコセラピーの4つに分けている。資格を取得しようとする会員は、それぞれ自分が実践する分野を定め、スーパーヴァイザーを選んでトレイニング契約を結ぶ。複数の分野で資格を取得する実践家もいる。

以下、4つの分野についてハンドブックの記載から引用して紹介する。心理臨床では、カウンセリングとサイコセラピーを、あまり区別しない考え方もあるが、TAでは、明確に区別している。ハンドブックではカウンセリングは、「クライエントの強み、資質、機能を高め、気づきを促し、問題をマネージメントするオプションとスキルを増やし、日常生活での個人の成長をもたらす」ものとして説明されている。それに対してサイコセラピーは、「クライエントの自己実現、治癒、変化のための能力を促進する目的で行う。古い、自己限定的なパターンを認識し、変化させる。現在の中にある過去の痛みを扱い、これからの自分の人生を自由に生きられるようにする」とある。

サイコセラピーでは、TAの重要概念である人生脚本、すなわち幼少期の決断に基づく無意識の人生計画に焦点を当てることが多い。過去の問題、子どもの頃からの感情の問題の解決を扱うサイコセラピーに対して、カウンセリングは現在の生活上の問題解決を助ける点で異なる（Stewart,I. & Joines,V.,2012）。サイコセラピーでは治癒cureという言葉を用いるが、対象は病気や障害のある人に限定されない。

教育は、子どもから大人までの学習領域でTAを活用する人のための分野であり、個人の成長とともに、職業的な面の成長をも含む。一方組織は、「組織の文脈を考慮して、組織内で、あるいは組織のために働く実践家のための分野」であり、組織で働く人の発達、成長、能力開発をめざす。たとえば企業のコンサルティングなどがその例である。このように幅広い分野に応用されていることもTAの特色といえる。

[3] 資格の種類

資格のうち、基本となるのは専門家としてTAを実践できる資格であるCertified Transactional Analyst（以下、CTA）である。トレイニングやスーパーヴィジョンを行うことができるのは以下、2つの上位資格である。

教育とスーパーヴィジョンを行う交流分析家Teaching and Supervising Transactional Analyst（以下、TSTA）は、日本では教授会員とも呼ばれている。TSTAの指導のもとに

暫定的に教育とスーパーヴィジョンを行うことができるのが、Provisional Teaching and Supervising Transactional Analyst（以下、PTSTA）であり、日本では准教授会員とも呼ばれ、TSTAをめざして訓練中の段階をさす。CTAがPTSTAになるには、トレイニング承認ワークショップ（Training Endorsement Workshop：以下、TEW）に参加した後、TSTAをめざしてトレイニングを行う契約を結ぶ。PTSTAは準備が整ったら、試験（口頭のみ）を受け、合格するとTSTAとなる。

トレイニングの契約から、試験を経て資格取得に至るプロセスを図1に示す。

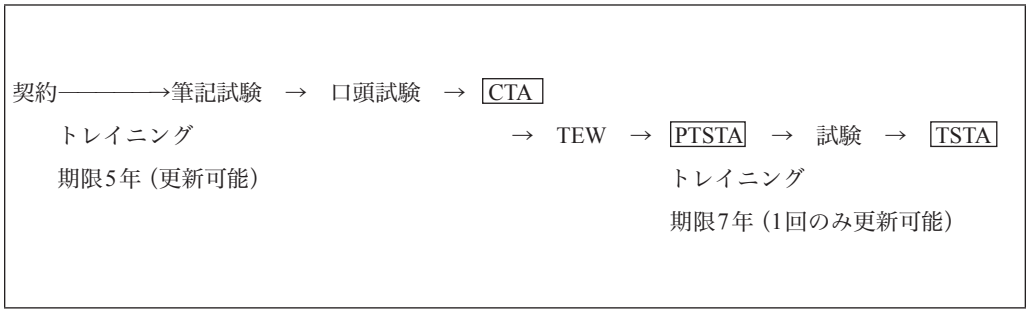

図1　TAのトレイニングと資格試験

2. CTAのトレイニングと資格の要件

トレイニング全体の基盤となるのはスーパーヴァイザーと個別に結ぶ契約であり、そのトレイニング契約をIBOCに届け出て承認を受けることが資格取得の出発点である。

契約は、双務的、つまりお互いの責任を明確にして結ばれるものである。基本原則は、トレイニーが「トレイニングを積極的に計画し、構造化することと、トレイニング・プロセスへの責任と同時に、個人として専門家としての成長への責任も担っている」ことである。トレイナーは、責任を持ってトレイニーを指導し、手助けする。また、試験のために適切な準備をすることや、トレイニングの正確な記録を確認することについてトレイニーと責任を共有する。また、資格について最新の情報を得ておくことも、トレイナーの責任である。

どのような内容をトレイニングとして認めるか、契約以前のトレイニング時間を算入してよいかどうかの判断は、スーパーヴァイザーに委ねられている。スーパーヴァイザーの裁量・権限・責任が大きいだけに、スーパーヴァイザーになるためのトレイニングには高い水準が要求され、厳正に資格認定がなされる。

[1] トレイニング時間

CTAの受験の際に満たすべき要件は、表1のとおりである。基礎講座であるTA101の内容は規定されているが、トレイニングの内容について、一定のカリキュラムはない。

表1　CTA受験の要件（ITAA, 2010）

1）TAの基礎講座TA101を修了していること
2）トレイニング契約の承認を受けてから、18ヶ月以上経っていること
3）専門分野における自国の認定条件を満たしていること
4）スーパーヴァイザーから2000時間の準備が整ったという推薦を受けていること
2000時間の内訳
① 750時間のクライアントとのコンタクト、うち500時間はTAを使ったもの
② 600時間の専門的トレイニング、うち300時間はTAを使ったもの（うち、90時間は自分が受験する応用分野のもの）
③ 150時間のスーパーヴィジョン、うち75時間はPTSTA,TSTAからのもの、うち40時間は、自分の契約しているスーパーヴァイザーからのもの
④ 500時間のさらなる専門性獲得のためのもの（自国の条件に照らし合わせてスーパーヴァイザーから認められたもの）

表1で2000時間の内訳にあるとおり、TAに限らず幅広い分野で専門的トレイニングの時間をカウントすることも特色の1つである。また、トレイニー自身が自らの成長のためにセラピーを受けることも推奨されている。

[2] 中核能力

TAの実践者としてふさわしい資質は、専門分野のための中核能力core competenciesとして述べられている。これを身につけることがトレイニングであり、その成果が試験で評価される。受験し、資格を得ようとする人（candidate、以下、候補者）には、以下の内容を試験で示すことが要求されている。

- 効果的な作業関係　working relationshipの形成
- 問題の定義と診断
- 治療目標または変化のための計画の定義
- 契約の締結
- プロセスとその効果についての適切な内省
- TAの当該分野における目標と状況に応じて適切な計画を展開すること
- 上記の実践的応用
- 実践家としての自分のパフォーマンスへの自信（限界も自覚しつつ）

この最後の項目には、実践をその場で提示することを重視するTAの考え方がよく現れ

ているといえる。当然、4つの分野ごとに中核能力の中身は異なり、サイコセラピーの場合は、以下のような項目となる。

①一般的要件

（理論を理解し、セラピーに適用すること、アセスメントと治療方針の決定、倫理綱領に沿った実践など。）

②治療関係

（自他の尊重、治療関係の重要性の理解、クライエントへの共感的感受性とクライエントに関する理解を伝達することなど）。

③TA理論

（TAの基礎理論を正確に理解し、臨床実践で応用すること、TAの主なアプローチの活用を述べ、最近の発展や異同についての知識を示すこと、介入をTAの理論と実践に沿って説明することなど。）

④契約

（ビジネス契約および治療契約の必要性を認識し、適切に結ぶ能力など。）

⑤計画：アセスメントと治療方針

（TAの概念を用いたアセスメントと診断のシステム、DSMなど一般に使用されている精神医学的診断システム、TA理論を用いて概念化した治療計画など。）

⑥実行：サイコセラピーのプロセス

（クライエントの正確な観察に基づき、TAの理論と哲学に関連する治療仮説を立てること、治療段階と治療契約にふさわしい介入の選択、介入の効果の評価など。）

⑦個人的な特質

（個人が自分の責任を引き受ける力を信頼し、成長し変化する力に反応するというTAの哲学へのコミットメント、個人の資源の強みと限界の理解、自己内省の能力など。）

このほか、中核能力の記述には、TAで重視する考え方やキーワードが多く含まれている。まず、契約の重視が大きな特徴である。そして自分も他者もOKと認め、尊重する“I' m OK , You' re OK”という基本的態度が基盤となっている。国際資格であるだけに、文化・社会的な差異とその影響を認識することにも言及されている。

また、クライエント、セラピストの双方にとって「自律性を伸ばすこと」が重視されており、これはTAがめざすゴールにほかならない。また、transactional analysisという名称が示すようにtransaction（交流、やりとり）に注目する点にも特色がある。その点は、中核能力として「他者理解と、自分の枠組みを脇に置いてコンタクトを失わない能力」「やりとりの中で自己一致を伝えること」があげられているところにも反映されている。

さらに、TAはグループセラピーで行われることも多く、グループ・プロセスを理解し、介入に効果的に活用することも強調されている。

3. CTA試験の実際

CTA試験では、候補者に中核能力がどの程度備わっているかを以下の方法で評価する。

[1] 筆記試験

受験の要件が整ったら、候補者は、まず筆記試験に出願する。これは、論文を地域コーディネイターに送り、試験官による審査（採点）を受ける形式で行われる。試験に関する書類は基本的に英語であるが、この論文本体は試験官が読める言語で書かれていればよい。

論文は、以下の4つの部分で構成されている。

A. 候補者の専門家としての自己像とtransactional analystとしての仕事

B. TAトレイニングを通して得た学習経験と、個人的成長に関する報告

C. クライエントの事例研究（または企画研究）

D. 理論と文献に関する質問

（候補者はTA理論と実践に関する6つの質問に答える。）

A～Dの中で重要な部分を占めるのが事例研究である。Cの事例研究の中で、契約、アセスメント、治療計画、治療関係、介入など、セラピストとしての中核能力が示される。

A、Bの部分を作成する中で、候補者は、自分がどのような職場でどんな実践を行っているかを明確に示す。また、自分がこれまで受けてきたトレイニングや、そこから学習したこと、成長発達の過程を振り返る。これは、候補者にとって自分の学習と実践の歩みを再評価し、アイデンティティを確認する機会となるであろう。

資格の取得は、専門的な実践が社会的に認知される契機でもあるが、同時にアイデンティティの獲得過程である。妙木（2012）は、「資格で求められているのは（この技法でやっていく、生きていくという）覚悟や諦念であって、実際本当に精神療法ができる、できない、うまい下手以前のことだと思う。」と述べている。筆記試験の論文作成は、まさに、「この技法でやっていく」という覚悟を固めるプロセスになるであろう。

筆記試験の配点は、A＝20％；　B＝10％；C＝35％；　D＝35％　で、100点満点で65％以上が合格の基準である。

採点者向けガイドラインとして、コメントをする際の留意点がハンドブックに記載されている。それには、候補者に敬意を払うこと、強みと弱みとを明らかにして口頭試験の指針となること、ポジティブなストローク[3]を含むこと、答えが不十分な場合には、何が期待されるかを明確に示すことなどが挙げられている。採点者には、TAの哲学である“I'm OK. You're OK”という基本的態度を保って候補者を評価することが求められるのである。

[2] 口頭試験

筆記試験に合格し、トレイニングの条件が整ってスーパーヴァイザーの推薦が得られたら、口頭試験を受験することができる。

口頭試験は、TAの職業的実践やトレイニング、専門家としての資質を見るための口頭試問と、事例のプレゼンテーションから成り立ち、時間はおよそ1時間（通訳付きの場合1時間半）である。試験官4名が試験官団を構成し、うち1名が試験委員長を務める。

準備する書類は、履歴書と、トレイニング記録、スーパーヴァイザーからの推薦状である。それに加え、自分の実践している場面の録音または録画を持参し、プレゼンテーションを行うことが特徴である。サイコセラピーであればセラピーセッションの録音（録画）5分間ずつを3例（少なくとも1例は個人ワーク、少なくとも1例はグループ、カップル、または家族のワーク）用意し、逐語録も添える。候補者は、録音を試験官とともに聴いた後に、それについての質問を受けて応答する。

CTAの口頭試験の実際について、ここからは、2013年8月に行われ、筆者が経験した試験を例に、その過程を説明していくことにする。

2013年8月15日～17日、大阪国際会議場で開かれるTAA国際大会に先だって13日～14日の2日間が、CTAおよびTSTA試験の日程として用意された。今回の試験はCTAの候補者が12名おり、並行して5名のTSTA試験も行われるため、試験官は大忙しで、初日の夕刻から試験が開始されることが予め知らされていた。

1）試験予定の発表

初日、説明会の会場に着くと、試験統括者exam supervisorをはじめとするスタッフが準備中であった。候補者、通訳などが次第に集まる中、2日間の全体の予定に加え、個別の試験時間・試験官が順次、掲示されていく。説明会が14時に開かれ、その日の18時から4名、2日目に8名の試験が行われる予定となっている。筆者は、初日18時開始の試験掲示の中に自分の名前を確認した。4時間後に試験と考えると急に緊張感が高まる。

候補者と試験官の組み合わせを見て、候補者は、割り当てられた試験官の中に交替してほしい人がいれば、申し出が可能であり、試験官の方も担当を辞退できる。親しい人であったり、これまでのトレイニングや試験などのいきさつによったり、理由は何であってもよい。試験官のみでなく受験する側も変更を願い出ることができるというルールは、試験としては極めて珍しいのではないだろうか。候補者、試験官、両者の権利が尊重されていることの現れであろう。

2）説明会

試験前には、候補者、試験官それぞれのための説明会が開かれ、互いにどちらにも参加できる。情報開示に関しても、両者は対等でコミュニケーションがオープンなのである。

候補者のための説明会では、試験統括者から、試験の性質、受験の際の心構えに加え、用意した受験書類の扱い、試験場の準備などについてオリエンテーションがあり、質疑応答がなされる。試験統括者は、試験の実施にあたって全体の管理運営を行い、試験官の配置

や調整などをする重要なスタッフである。

今回、試験統括者の話の中で印象に残ったのは、候補者は自分で車を運転するドライバーという比喩であった。つまり、質問に受け身で答えるのではなく、積極的にプレゼンテーションし、試験のプロセスを推進するのは候補者自身であるということである。質問の内容がわからなければ確認すること、自分の答えが相手の求める内容だったかどうかフィードバックを求めること、応答に不足の点があれば補って評価を高めていくことができることなどの説明がなされた。試験のプロセスがうまく進まない場合に調停・調整役として呼ばれるプロセス・ファシリテーター process facilitator もその場で紹介された。ハンドブックによると、「プロセス・ファシリテーターは、試験官の経験豊かな人であり、その目的は、試験手続き中に生じる問題を試験官団が解決するのを助けることにある。試験中のいつでも、誰もが試験委員長にプロセス・ファシリテーターを呼ぶよう要請することができる」。このしくみにも、TAの試験で進行するコミュニケーションのプロセスを重視していることが反映されている。試験のプロセスに問題が生じた場合、第三者として介入し問題解決を助ける人を、候補者あるいは試験官が呼べるというしくみは、ユニークなものであろう。

これに続く、試験官のための説明会は、試験官としての心得、通訳付きの場合の留意事項、文化の違いについての説明、などの内容であったと出席者から聞いた。試験官のためのガイドラインでは、質問のしかたやフィードバック、候補者の強みや能力を引き出し、候補者との間にI'm OK- You're OKの関係を築くことなどが挙げられている。

3）試験会場の準備

候補者自身が主人公として試験をマネージメントするという考え方は、会場の準備にも現れる。試験会場には事前に入室可能で、録音機材をセットすると共に、自分の好きなように椅子やホワイトボードなどを配置してよい。自分が居心地よくプレゼンテーションできるよう、会場をセッティングするのは候補者の責任である。

試験の30分前からの15分間が、候補者の会場準備に与えられた時間であった。会場にあったのは、椅子とテーブル、ホワイトボードである。筆者は試験官の椅子を4つ、ゆるやかな弧を描くように並べ、座ってみて試験をイメージしながら、向かい合うように候補者（筆者）の椅子、その斜め後ろに通訳者の椅子を配置した。横のテーブルに、セラピー事例の提示用と、試験の録音用の2台のICレコーダを置き、再生・録音のチェックを追えて準備を終了した。

CTAの口頭試験では、候補者は開始から終了までを録音することが当然の手続きとなっている。試験のプロセスに異議申し立てをする際、録音がないと根拠を示すことができないためである。異議申し立ての手続きは、ハンドブックに明記され、試験での候補者の権利が守られるようになっている。

日本の面接試験や口頭試問というと、面接官が机の向こうに座って書類を見ながら質問する場面を想像するが、CTA試験では椅子だけが並んだ、小規模なワークショップのようなセッティングが通常らしい。試験官との会話、互いのやりとりを重視するTAの文化を反

映したものといえよう。

4）試験

試験委員長が候補者を控え室に迎えに来てくれ、筆者の場合は通訳者と二人で会場に入った。試験官一人ひとりと挨拶し、録音をスタートさせて、席に着く。最初は、トレイニング歴や現在の仕事等について質問があった。どのようなトレイニングをしてきたか、TAをどのように活用しているか、筆記試験（評価表のみ英訳して提出している）に関連した質問などで、20分程度であった。その後、セラピー事例の録音を聞き、それについての質疑応答が続いた。事例について、契約、クライエントのアセスメントに関する質問があり、セラピーの内容をTAの言葉で解説し、図示することも求められた。介入の意図、効果、別の方法でセラピーを行った可能性などについても質問がなされた。試験そのものは1時間ほどで終了した。

5）採点・評価

試験官が採点結果を出し合い、合否を決める際に、候補者は退席しても、その場で聞いていても構わないが、ほとんどの候補者は立ち会う。筆者もその場にいることを希望した。

採点用紙の項目（表2）に沿って、各試験官から点数が読み上げられ、委員長が集計する。最後に試験官が順に合格か合格見送りか、意見を表明し、4名中3名以上が合格と判定すると合格が決まる。きわめてオープンな採点場面である。合否が決まった後には、試験官一人ひとりからコメントが与えられる。筆者の試験では、試験官から低い評価をつけた項目に関してはその理由、今後学習すべき課題などのフィードバックがなされ、大変有益であった。候補者の退室後、試験官は、ミーティングを行う。

表２　口頭試験の採点項目（ITAA, 2010）

1）専門家および個人としてのアイデンティティ
2）I’m OK-You’re OKの関係の確立と維持
3）理論：TAの理論的コンセプトを用いて、サイコセラピーを概念化する能力
4）TA実践のための統合性：幅広い治療のオプションを論じ、選んだストラテジーを裏付けることができる能力
5）クライエントの明確なアセスメント
6）契約と治療方針
7）有効性：候補者は創造性と有効性を示し、関係、契約、治療段階との関連で介入を論じることができるか
候補者は、クライエントへの介入の効果をモニターし、それに対応しているか
8）専門家であること
9）自分自身を省みる能力
10）総合評価：TA概念を用いて治療関係の理解と実践を示すこと
（各々5点満点で評価する。いずれかの項目で全員が1点をつけるか、または合計点25点以下の場合、合格見送りとなる。）

6）試験後

控え室に戻って結果を報告すると、試験統括者が“Congratulations!”と迎え、“New CTA!”とコールし、その場にいるスタッフ、関係者から拍手される。合格者には試験統括者が黄色に金文字で“I PASSED”と記されたリボン（図2）をつけてくれる。試験後の大会期間中、合格者はこのリボンをつけていることが慣例で、周囲から合格を祝う言葉がかけられる。つまり、このリボンによって、注目する、ほめるなどのポジティブなストロークがもらえるしかけである。

試験からもどると、候補者には、試験官を評価するための用紙が配られる。試験官がその役割を十分果たしていたかどうかを候補者が評定するしくみである。候補者が一方的に評価されるのではなく、試験官にフィードバックするこの手続きは、公正で質の高い資格試験を行っていく上で、大変重要なものと考えられる。

予定された全員の試験終了後、候補者のデブリーフィングのためのミーティングが行われた。合格して資格を得た者も、今回は合格見送りとなった候補者も、感じたことを出し合う。今回試験で通訳を務めてくれた人たちも、体験を話す。通訳者や試験統括者をはじめとするスタッフに、感謝の言葉が候補者から口々に語られた。

このような資格試験は、試験統括者、プロセス・ファシリテーター、試験官ほか、多くのスタッフの貢献に支えられている。ことに試験官の役割は重要であり、候補者の力を引き出すこともTAの実践者として力量を発揮する機会の一つとみなすことができよう。

[3] TAの資格試験の特徴

これまで見てきたCTA試験のプロセスでは随所に、TAで重視する考え方、つまりTAの哲学が色濃く反映されていた。試験の特色は、以下のようにまとめることができる。

①契約の重視

TAのトレイニングと資格認定ではトレイニーとトレイナー、候補者と試験官など、互いの役割や責任について、明確な説明がなされている。

②オープンコミュニケーション

トレイニングや試験についての事前の情報提供に加えて、採点の過程も候補者に開示されている。また、候補者は試験中・試験後に、良かった点や学習すべき課題についてフィードバックが得られる。

③“I'm OK, You're OK”という立場の具現化

試験官と候補者は対等な関係であり、互いの権利が尊重される。試験官のガイドラインや採点表の項目からは、試験官・候補者の両者とも、TAの哲学である“I'm OK. You're OK.”という立場を試験でも保つことが重視されている。

図2　合格者のリボン

④実践例に基づく評価

筆記試験では事例研究の論文を提出し、口頭試験では口頭試問にとどまらず、事例のプレゼンテーションを行う。逐語録だけでなく録音（録画）を提示することは、言葉だけでなく、非言語的コミュニケーションも含めた提示となる。これは、実際にどうTAを活用しているか、いかに有能な実践者であるかを具体的に知るために有効である。

専門職にふさわしい倫理的な実践を行うためには、知識、技術だけでなく価値観を修得することが不可欠である。そのためには、理念を頭で理解するにとどまらず、体験を通して学習することが重要であろう。TAの試験では、全体を通して、TAの哲学と価値観を感じとることができる。つまり、試験は、価値観や哲学を明確に意識させ、浸透させる機会とみることができる。

また試験は、基準を満たしているかどうかを判断するだけにとどまらない。これまで獲得した中核能力を確認し、これから身につけるべき資質や学習課題を明確にすることが、試験の意義である。資格が取得されれば終わりではなく、トレイニングと試験で得たものをその後の実践やトレイニングで活かすことこそが重要であるといえる。

一方、このようなTAの試験に臨む際、越えるべきハードルもいくつかある。一つは、トレイニングの開始にあたり、スーパーヴァイザーを見つけて契約することと、トレイニングの機会を持つことの困難さである。日本ではまだスーパーヴィジョンを行える有資格者が少ない現状がある[(4)]。ただし、インターネットが普及した最近では、スカイプ等の活用により、海外のスーパーヴァイザーからスーパーヴィジョンを受けたり、仲間とディスカッションや情報交換をしたりすることも、格段に容易になってきている。

次に、コミュニケーションを重視する試験が、英語を用いて行われることによる負担である。国際資格であるから、資格に関わる情報収集や提出書類の準備から英語を使用するのに加え、口頭試験でのやりとりも英語で行うか、あるいは通訳者を介して行うことになる。

第三には、試験に持参するワークの録音を準備するという課題である。クライエントの了解を得て録音をした中から、3事例を選ぶ。面接の録音から効果的な介入が現れている5分間を選び出し、タイトルをつけ、プレゼンテーションの内容を考えるのは、かなりの時間と労力を要する作業である。しかし、そのために何度も録音を聴き直し、解釈・説明を試みることは重要な学習の時間でもある。

4. スーパーヴァイザーの育成

TAのトレイニングの基盤となるのは、契約に基づくスーパーヴィジョンである。

CTAの資格を取得後、次の段階としてTAの実践家を育成するための教育やスーパーヴィジョンにたずさわろうとする人も多い。教育とスーパーヴィジョンを行う交流分析家TSTAは、名前の通り、教師とスーパーヴァイザーの両面を兼ね備える上位資格である。

従って、それぞれについて経験とトレイニングを積む必要がある[5]。

他のサイコセラピーの資格システムでも、スーパーヴァイザーの認定を行っているものはあるが、スーパーヴィジョンと別に教育のトレイニングを規定している制度は類を見ない。TAでは、応用分野の中に「教育」があるだけに、どの分野の専門家であっても教える実践を重視していることがわかる。

以下、PTSTA、TSTAになる過程について、簡単にふれる。

[1] PTSTAになる手続き

PTSTAになるには、CTA取得から1年以上経過した後、ワークショップ（TEW）に参加し、スーパーヴィジョンと教育両面の資質と準備性について評価を受ける。

このワークショップでは、ティーチング、スーパーヴィジョンをグループセッションで実演し、討議し、フィードバックを受ける。また、候補者は、自分がトレイニーに対して行うトレイニング計画の概要書（Training Proposal Outline：TPO）を作成して持参し、プレゼンテーションを行う。さらに、試験の基準や倫理、専門職としての基準についてもグループで討議し、学ぶ機会がある。これらのプレゼンテーションや討議に対して、TSTAのスタッフから強みや弱点、不足しているところなどのフィードバックが得られる。ここで問題がなければ、あるいは何らかの条件がついた場合はトレイニングでそれを満たした上で、TSTAになるためのトレイニング契約を結び、IBOCに届け出て、PTSTAとなる。

[2] TSTAになる過程

TSTAをめざすトレイニングの契約期間は7年間であり、1度だけ更新が可能である。つまり14年間が最長で、その間にTSTA試験に合格しなければCTA資格にもどる。

1）トレイニングと資格の要件

トレイニングでは、教育とスーパーヴィジョンのそれぞれについての経験が要求される（表3 ）。長期にわたってトレイニングを積み重ね、細かく定められた条件を満たすことに加えて、記録を管理し、毎年スーパーヴァイザーに報告することも求められる。

表3　TSTA受験の要件（ITAA, 2010）

［教育部門］
- TEWで倫理、教育、トレイニングに関して承認されている
- TAを教える経験300時間
  （うち45時間はTSTAによるスーパーヴィジョンを受け、そのうち20時間はライブ・スーパーヴィジョン）
- 専門職として教育を受け成長する時間100時間以上
- 学会や専門的な会議でのプレゼンテーション12時間以上
  （うち6時間は全国会議または国際会議）

［スーパーヴィジョン部門］
・TEWで倫理、スーパーヴィジョン、トレイニングに関して承認されている
・スーパーヴィジョンを行う経験500時間
（2人以上のスーパーヴァイジーにそれぞれ40時間以上必要）
・スーパーヴィジョンについてのスーパーヴィジョン
TSTAから50時間（うち、25時間はライブ・スーパーヴィジョン）
・専門職として教育を受け成長する時間100時間以上

出願の際は、3通（現在のスーパーヴァイザーに加え、候補者がスーパーヴィジョンを受けた別のTSTAから2通）の推薦状が必要である。このほか、受験の要件として、候補者はCTAの試験官を3箇所で計5回以上経験していなくてはならない。また、TSTAのためのトレイニング契約の期間に、そのスーパーヴァイザーが試験官を3つの開催地で経験しているという条件もある。

試験は、年1回のITAA大会のほか、他の団体がヨーロッパやオーストラリア等で設定する機会もある。しかし、日本で生活し、働きながら、国外の大会に度々参加して試験官を務める（英語を用い、場合によっては通訳を伴って）というのは、かなりの時間・費用・エネルギーを必要とする。

このように、後進を育成するTSTAをめざす人（そしてTSTAを育てるスーパーヴァイザー）には、資格認定に関わる最新情報をキャッチし、組織が行う資格認定のプロセスに積極的に関与し、貢献するという役割が求められるということであろう。

自分の生活の中にTAのトレイニングを組み込み、それらを捻出するには、意欲も計画性もなくてはならない。これは試験の経験だけでなく、ふだんのトレイニングの機会にもいえることである。

2）TSTA試験

TSTAの試験は、3つの部門に分かれる。(A) 理論・組織・倫理の部門に合格して通過すると、(B) 教育部門、(C) スーパーヴィジョン部門に進むことができる。(A) 部門は1時間15分、(B)（C）部門はそれぞれ約1時間行われ、通訳付きであれば、時間は50％増しとなる。

候補者は、教育部門では、ボランティアの聴衆を相手に用意した20分の授業を行う。また、TA101に含まれる題材からくじ引きで選んだテーマについても教える。スーパーヴィジョン部門では、その場でCTAやPTSTAのスーパーヴィジョンを行う。つまり、候補者は教育、スーパーヴィジョンのいずれもその場で実践を行い、その後に口頭試問がなされて評価を受ける。

スーパーヴァイザーの育成は、日本のセラピストのトレイニングにおいても、重要な課題である。平木（2012）が述べているように、セラピーの経験や、スーパーヴィジョンを受けた経験があるからといって、スーパーヴィジョンができるわけではない。スーパーヴァイザーになるにはそのためのトレイニング、いわば「スーパーヴィジョン学」（金丸、

2012）を学び、技術を磨くことが不可欠である。

TAでは、一対一のスーパーヴィジョンだけでなく、グループを活用することも多く行われている。また、トレイニンググループやワークショップにおいて、ライブ・スーパーヴィジョンがしばしば行われる。さらにその場でスーパーヴィジョンのスーパーヴィジョンを行うことも多い。たとえば、CTAが行ったセラピーをPTSTAがスーパーヴァイズし、そのスーパーヴィジョンのスーパーヴィジョンをTSTAが行う、といったやり方である。

こうしたグループの活用により、自分の主要なスーパーヴァイザーからだけでなく、さまざまなスーパーヴァイザーから指導を受けるチャンスができる。その場に参加している他のメンバーも、スーパーヴィジョンの多様な方法や技術を学ぶことができ、相互に資質の向上を図る機会となる。

グループでのこのようなスーパーヴィジョンを成立させるには、自分がどのような立場でその場にいるかを明らかにする明確な契約や互いの信頼関係が基盤になる。スーパーヴィジョンそのものをスーパーヴァイズしてその技量を上げていく方法は、TA以外の他のアプローチでも広く活用でき、有効であろう。

現在日本では、心理職の国家資格化実現に向けて、各専門職団体が努力を続けている。またソーシャルワーカーの分野でも、スーパーヴィジョンを行う上位資格やスーパーヴァイザーを認定する制度ができている。専門職をめざす学生の実習スーパーヴィジョンも、重要な課題である。それぞれの専門職や仕事によってスーパーヴィジョンの様相は異なるが、スーパーヴィジョンの理論と方法の研究、スーパーヴァイザーを育成する方法の開発、スーパーヴァイザーが互いに研鑽を積むシステムづくりは、急務といえよう。TAのトレイニングはそのヒントになるものと考えられる。

おわりに

これまで、TAのトレイニングと資格について、筆者自身の体験も交えて紹介し、TAの特徴を論じてきた。専門職としての価値観を身につけることやスーパーヴィジョンの方法を学ぶことは、大学における専門職教育、ことに実習教育において重要な課題の1つであり、今後も取り組みたい。

本論文の作成にあたり、筆者のスーパーヴァイザーであり、TAのトレイニングと資格認定についても貴重なご助言、ご指導をくださったTSTAの門本泉先生（府中刑務所調査専門官）にお礼申し上げる。また、ITAAについて情報を提供してくださったJanet Chin氏（ITAA、IBOC）と、ハンドブック邦訳版の使用を許可してくださったNPO法人日本TA協会のご厚意に感謝する。

注

(1) 従来は西太平洋TA協会（Western Pacific Association of Transactional Analysis；WPATA）として活動してきた組織。2013年8月に最初の会合を大阪で開催した。

(2) 現在公開されているのは、2009年12月改訂の内容が大部分であるが、一部（TEWのみ）が2010年に改訂された。

(3) 交流分析の重要概念のひとつで、相手の存在を認めて発せられる刺激のこと。ポジティブなストロークは、相手が気持ちよく受けとる行為で、たとえば長所を指摘したり、ほめたりすることがその例である。

(4) 日本にいるPTSTAは9名、TSTAは4名である（2013年8月現在）。

(5) 教育とスーパーヴィジョンのうちどちらか一方の資格を認定され、スーパーヴィジョンを行う交流分析家（STA）、または教育を行う交流分析家（TTA）というケースもあるが、稀である。

引用文献

Heath J. & Suriyaprakash,C.（2013） A new era in transactional analysis accreditation. the Script,48（8）, pp.1-3. ITAA

ITAA（2010）Training and Exams Handbook

http://ta-trainingandcertification.net/ta-training-and-exams-handbook.html （2013年9月20日取得）

平木典子（2012） 心理臨床スーパーヴィジョン 金剛出版

金丸隆太（2012） 交流分析家になる過程 精神療法、38, pp.799-807.

妙木浩之（2012） セラピストの資格 精神療法、38, pp.745-750.

日本TA協会（2011） ITAA「トレイニングと試験に関するハンドブック」邦訳版 http://www.taaj.or.jp/handbook.html（2013年9月20日取得）

Stewart,I. & Joines,V.（2012） TA Today 2nd ed. Melton Mowbray：Lifespace